●書学書道史学会
会報
第4号

平成14年(2002)10月1日発行
編集・発行
書学書道史学会
事務局
東京都渋谷区桜丘町29-35
〒150-0031 美術新聞社内
TEL(03)3462-5251(代)
FAX(03)5489-7288(直)

視点

周金文研究雑感

浦野　俊則

◇殷周時代金文の研究を振り返ってみると、資料の編年ということが一つの大きなテーマとなっている。陳夢家や郭沫若の編年研究は、その先駆であった。その後、白川静をはじめとして、多くの補正が行われてきたが、これまでの暦法研究では、金文中に記述されている年月・月相・干支記事をすべて矛盾なく配列することができなかった。

◇近年、平勢隆郎は既存資料をすべて矛盾なく配列できる説を提出している。この説が正解ならば、殷周の暦法が復元され、金文研究にとって画期的なことである。私自身、その当否を検証してみたいという気持ちはあるが、現実には着手できずにいる。ともかく、今のところ、直感的に「これは良さそうだ」と感じている。

◇金文の新出資料をこの十年来集めているが、その整理とともに書風の類別を試みつつある。それは、松丸道雄がいうように西周青銅器の製作が王家の占有技術であるなら、金文も王側の人物、きわめて限定された範囲の人によって書かれたものである。そうすると、甲骨文字と同じように書風を類別・系列化することが可能だと考えてのことである。今まで試験的に調査したところでは、同一時期に見える書風は、比較的少数の手に類別できる。

◇これまで、西周金文の時代比定が曖昧だったので、系統化が困難であったが、平勢説を援用して、年代の明らかな金文と関連する無紀年金文を追加配列し、編年資料数を増加させれば、今まで以上に精密な書風類別を展開できるのではないか。というのが、当面の思いである。これは自分でやってみたいと思っている。

◇もう一つ考えているのは、松丸氏のいう諸侯製作器の書風が王朝製作器と差異があるのか、あるとすればどのような差異があるのかという点を検討してみたいことである。これは、ずいぶん前から思いつつ手をつけずに過ごしてきたものである。諸侯製作器がいつ頃どの辺から始まり、どのように広まっていったかという点まで見えてくれば、周時代の書の歴史がいっそうはっきり書けるようになるはずである。

◇近年、戦国時代の簡牘が続々と出土し、その研究が活発であるが、楚簡の文字と同形の文字が、楚系の金文にも見える。それらは、刻銘であり、その筆勢も簡牘文字と同様で、簡牘文字の書き方をそのままに青銅器に刻したものと見られる。

◇ところで、金象嵌銘の美しい「鄂君啓節」の文字は、楚簡に見える当時の日常通行字体と従来の金文（正体）とが混在している。以前から、通行体の混用だとは思っていたが、楚簡の文字を多く見るようになって、いっそうはっきり識別できるようになった。戦国時代は、書体の分化が大きく進んだ時代だが、このような事態があることも考慮に入れておく必要があることをあらためて感じているところである。

随想
真偽問題

晴耕雨読の身に思う

角井　博

学生の頃、近代詩文を得意とする一学生が「人間の本性は善だけでも悪のみでもない？云々」の作を示すと、西川寧教授はすかさず「善と悪とをどうやって見分けるの□□君、いっそ目を瞑って黙っていることだな」と戯れに朱書された。血気盛んな我々若者は、その咄嗟の切り返しに少々むかつく思いであったが、老いた身でいま振り返って見ると、近ごろ報道される殺伐たる犯罪事件は別として、人間の善悪の線引きはお国柄や時代、その人の立場などによって異なろうから、なるほど容易でないことが首肯できる。

筆者はその後、東京国立博物館の蔵番として文化財の陳列・保管に従事するが、その業務の背景には常に列品資料としての善悪・美醜、そして真贋（偽）の問題がつきまとっていた。これら諸問題については概ね、大学・美術館に勤務する学者をはじめ鑑識家・美術史家なる人物が解決に努めているが、実はそれらを扱う美術商や収集家の存在もあって、すべての人に共通する納得のいく判断基準を設けることはこれまた難しい課題となっている。

真贋問題はなにも骨董の世界に限ったことではない。最近世間を賑わしている食料・薬品・化粧品には偽り物が多いし、いや人間そのものの贋物も代議士やアイドルばかりか学者にも出現している。考古遺品のニセ発掘などは以てのほか。ただし物そのものに罪があるわけではなく、埋めたり掘ったりする学者の名誉欲と悪意とに罪があるのである。もともと書画の世界には、師弟間の学習や古典研究の段階において、忠実に技法を探ったり、真摯に追体験を試みた模倣作・習作というものがあり、本物同様に観賞を享受できるものがある。ただ、それらが悪意をもった人々によって欺き騙される対象として市中に出回ったり、初めから営利を目的とする贋作も出現して、世間を騒がせることになるのである。文学・音楽の分野では時として盗作問題を生ずるが、体や口で表現する芸事の世界には模倣という所業なしには成立しない背景がある。それにしても世はまさにハイテクの時代で、クローン人間などは本物・偽物の域を掛け離れて現代社会の大問題となっている。

さて、悪意を伴う偽物には厳然たる態度を示すべきだが、こんな世の中だからこそ、書画骨董の真贋についてはもう少し大らかな気性をもって接してもよいのではないかと近ごろ思っている。もともと日本人は潔癖症が強く、こうした模写摸造の類、似せたものをひどく忌み嫌う傾向にある。それを究明すると鬼の首を捕ったように吹聴したり、それらを収蔵する人を軽蔑したりもする。しかし中国人には、ふと振り返ると書棚には王羲之も顔真卿も、宋四家や趙孟頫も、文徴明・董其昌や鄧石如・趙之謙も見当たる収集があるというから、王羲之の赤壁賦、康熙字典の萬暦版などにはニコニコと失笑し、もしも贋作に資料性や意味があるならば、それを非難することは避けるべきであろう。

中国古代にはおいては青銅器の模造があり、奈良朝舶載の王羲之書も搨本である。書画にしても陶磁器にしても、贋作があるから道具屋と学者が飯を食えるという裏話もある。かつて米国の某美術館において、贋作を多く含む展覧会が開催されたことがある。世人はこれを誹謗したが、主催者側は秘蔵品の悪口を言っても意味がない、一度はすべてをオープンにして皆で研究しましょう、と言って平然としていたという。書学書道史学会において真偽問題は重要事であるが、先ずは情報交換の場であってほしいし、時と場合によっては真贋を超越して瞑想することも必要であると思われる。

書学藻塩草

美術史界と寄合書き

名児耶　明

「高野切」ほかの例のように、書の歴史で確認できる書写分担して作品を完成させることが、広く日本美術に共通のことではないかと、美術史界では、工芸品や絵画作品での共同作業、書で言う寄合書きに関心が集まっている。それは、明治以降西洋美術の影響などから、わが国の江戸時代以前の画家や工芸家を個々に活躍する一芸術家として見ているために、過去の作品もすべて一人によって作り上げられていると錯覚をしていたことへの反省からかも知れない。工芸品はもちろん、屏風や襖絵なども中心となる画家と弟子が参加し複数で作り上げていることがわが国ではあたりまえだったのである。

紀貫之（八七〇?—九四五?）の筆と伝わる「高野切」が、実際には三人の筆跡であることは、書の世界ではよく知られるところである。仮名遺品では、こうした複数による書写の分担、いわゆる寄合書きがほかにも見られる。伝藤原行成筆「伊予切」、伝西行筆「山家心中集」、伝藤原行成筆「針切」、伝藤原伊行筆「戊辰切」伝寂蓮ほか筆「源氏物語絵巻詞書」等である。これは当時珍しいことではなかった。平安時代末期に藤原行成から六代目の伊行が自分の娘のために書き記した書論『夜鶴庭訓抄』には、「法華経一部を人々あまたに書かするに、一の巻、八巻をばその中の手書きに書かすべし」とあって、『法華経』八巻を大勢で書写するときには初めと終わりの重要部分をその中でもっとも能書に書かすべきであると書写分担についての論を展開していることからも明らかである。写経と古筆（仮名筆跡）では内容が異なり、該当しないとする考えもあるだろうが、経典に使用する料紙の装飾は仮名筆跡の料紙に多くの点で共通し、もともと書写という行為そのものも当時の貴族には教養のひとつとして、経典であろうと仮名であろうと文字を書くことは日常のことであった。まして複数で何かを清書するときの発想に違いはなく、どんな場合も清書には能書を重要視することは当然であろう。したがって、経典での分担の考えが、仮名の清書分担とも通じるはずである。

ところが、「高野切」と同じく清書本である「伊予切」（和漢朗詠集）は、三人の筆跡ながら、初めの二人（第一種と第二種）が上巻の途中で交代し、下巻では第二種の人物と第三種の人物とは漢詩の途中で交代するなど、不可解な分担である。第三種についてはずっと後の補写とするのが大方の考えだが、それも十分な説明が出来ていない。それはともかく、分担がきわめて不規則である。伝西行筆「山家心中集」も、同じように不規則な分担が見られるが、こちらは、もともと清書でないことは明らかで、資料として書写され、書写する人たちが自分たちの都合で書き分けたらしい。こうしたいくつかの例をみると、書における寄合書きには、清書などの公的な場合のやり方と、私的な場合との違いがあることに気づかされる。

さて最近、「香紙切」や「一条摂政集」それに藤原定家の遺品ほかすでに知られた古筆類にもより細やかな調査研究がなされ、似た書風ながら複数の手になるのではないかという考えが注目されてきている。その背景には、我々が一筆と教えられていた作品に、かなり以前から書家たちが複数ではないかと指摘をしたり、近年それを研究者が検証し始めたことが考えられる。そこで、こうした寄合書きの研究を、これからの書道史での重要な研究テーマにしてもらいたいものである。そうすれば、美術史界に先んじて日本の美術における共同作業の解明につながるはずで、その時書道史界は美術史界の中で一目おかれる存在になるような気がするのである。

本年度・第13回大会開催案内（最終連絡）

本年度の第13回書学書道史学会大会について詳細をお知らせします。大会は、11月15日㈮から17日㈰までの３日間にわたり、京都教育大学キャンパスほかで行います。奮ってご参加下さい。日程並びに発表者等、要項は以下の通りです。ご参加の申し込み等は、同封の「参加申込ハガキ」で10月末日までにお願いします。

〈日　程〉

【11月15日㈮】

16：30～　理事会（於京都ガーデンパレス／TEL075-411-0111）

【11月16日㈯】　会場　京都教育大学・１号館

9：00～　受付（於１号館Ｃ棟入口ロビー）

9：30～10：30　**総会**

10：40～12：00　**〈第１会場／研究発表〉**

①「明代の法帖に関する一考察　―明代文化史の流れの中で―」増田知之（京都大学大学院）

②「楊守敬の書法論　―その特異性と影響力について―」中村史朗（京都市立塔南高等学校）

10：40～12：00　**〈第２会場（日本部会）／研究発表〉**

③「近代における日本人のアジアでの建碑　―『台湾地区現存碑碣図誌』所収の碑碣を中心に―」森岡ゆかり（会員）

④「藤原定家の筆跡にみる〈字すがた〉と〈書のかたち〉の特質」四方康子（会員）

12：00～13：40　昼食休憩・「京都学派とその周辺遺墨資料展」参観

13：40～15：00　**〈第１会場／研究発表〉**

⑤「韓国の書と藝」萱のり子（大阪教育大学）

⑥「金農像をめぐって」鈴木洋保（京都女子大学）

13：40～15：00　**〈第２会場（日本部会）／研究発表〉**

⑦「『夜鶴庭訓抄』の残した足跡」永由徳夫（駒場東邦中学・高等学校）

⑧「『眺望集』『続眺望集』関連の短冊手鑑について」田中之博（ＭＯＡ美術館）

15：00～15：20　休憩

15：20～17：20　**〈第１会場／研究発表〉**

⑨「富岡鉄斎　―書美の特異性―」野中浩俊（新潟大学）

⑩「唐代における書法の改変と型式化―智永『真草千字文』をめぐって」下野健児（花園大学）

⑪「日本・台湾書道交流史試論」河内利治（大東文化大学）

17：30　閉会

18：00～20：00　**懇親会**（於藤森神社参集殿）

【11月17日㈰】　**特別鑑賞行事**（於京都国立博物館／TEL075-541-1151）

10：00　現地集合

10：30～11：00　解説（赤尾栄慶氏による）於館内

11：00～12：00　作品鑑賞（本号５頁「出品一覧」参照）

12：00　現地解散

《研究発表⑨レジュメ》

富岡鉄斎
――書美の特異性――

野中　浩俊

幕末の京都に生まれ、明治・大正という日本文化の転換期に活躍した富岡鉄斎（1837―1924）は、自らは学匠を以て任じたが、89年の長い生涯を通じて一万点をはるかに超えるといわれる書画を遺している。

彼の書は、生前より一部で高い評価を得ていたものの、ともすればあまりにも高い画名に覆われて等閑視される傾向にあつた。

そこで私は現存する最早期の書、二十一歳の筆録から絶筆に至るおよそ70年間の彼の書を通覧し、書風を断代的に分類し、その来源を追い、併せて彼の学書法の特異性を論じた（『国際書学研究／2000』）。

ところで、鉄斎が没して80年を迎えるが、今日においても京都の街中では彼の手になる老舗の看板や、旧家の扁額が人目を引き、また、多くの愛好家によって彼の書画は大切に蒐集愛玩されている。さらに関西一円に点在する遺蹟には、彼特有の碑文の書が〝金石の気〟を放っている。

これまでに国内各地での大小さまざまな「鉄斎展」や海外数ケ国における大規模な企画展が開催され、また多くの画集が発行された結果、彼の芸術に対する評価は近年とみに高まり、鉄斎は今や我が国近代を代表する芸術家として確固たる地位を築いている。

本発表においては、書幅・書額・巻子・折帖・屏風・画賛・書翰・扇面・団扇・色紙・短冊・題簽・題跋・筆録・箱書・器玩・碑文・篆刻等、さまざまな書式や、楷・行・草・隷・篆・仮名等、あらゆる書体に挑戦した鉄斎の表現の多様性に着目し、彼の芸術を生み出した要因は何か、彼の学問と芸術について考察したい。

また、これらの考察を通じて、鉄斎の書の特質をより明確にし、さらに金石趣味・文人精神を柱とする鉄斎芸術の特異性について言及したい。

【特別鑑賞】作品一覧（予定）

14・10・17／於京都国立博物館

主な展示予定作品リスト（11月6日～12月8日）

〈日中、書の名品〉

〈中　国〉

（東晋時代）
・宋拓十七帖（上野本）（当館蔵）

（西魏時代）
●菩薩処胎経（知恩院蔵）

（隋時代）
・宋拓真草千字文（当館蔵）

（唐時代）
●真草千字文（個人蔵）
●世説新書巻第六残巻（当館蔵）
・宋拓集王書大唐三蔵聖教序（当館蔵）
◎太上業報因縁経巻第八（当館蔵）

（南宋時代）
・論語集註草稿　朱熹筆（当館蔵）

（明時代）
●陶淵明・飲酒二十首　文徵明筆
・五律　王維「終南山」張瑞図筆

〈日　本〉

（平安時代）
●灌頂歴名　空海筆（神護寺蔵）
●稿本北山抄巻第十（当館蔵）
●藤原忠通筆書状案（当館蔵）

（鎌倉時代）
◎源空・証空等自筆消息（興善寺蔵）
◎夢記　明恵筆（当館蔵）
●教行信証　親鸞筆（真宗大谷派蔵）

※●は国宝、◎は重要文化財。
※確定リストは11・16に大会受付にて配布予定。

《研究発表③レジュメ》

近代における日本人のアジアでの建碑

―『台湾地区現存碑碣図誌』所収の碑碣を中心に―

森岡　ゆかり

ここ数年来、書道資料を活用した晩唐詩研究を試み、「故宮博物院蔵杜牧「張好好詩」本文小考」（『懐徳』第67号、1999年1月）、「伝小野道風筆許渾詩本文について」（『和漢比較文学』第26号、2001年2月）に、成果の一部を発表した。2001年2月台北の中国文化大学に赴任し、2002年度は中央研究院中国文哲研究所短期訪問学人を兼ねている。2年間という台湾での長期研究の機会を得たため、神田喜一郎が教鞭をとった台北帝国大学の研究（「台北帝国大学の女子学生―大森政寿と山根敏子を中心に」〔『大学史研究』第17号、2001年11月〕）や、台湾赴任経験のある鈴木虎雄の研究（「日本京都学派漢学者鈴木虎雄之李商隠観」〔中国李商隠研究会第6届年会暨国際学術討論会提出論文、2002年4月〕）など文化交流に関わるテーマについても研究をすすめてきた。本報告では特に碑碣に着目して考察を深めることとする。

近代、日本が帝国として版図を広げるにつれて、多くの日本人が台湾、朝鮮半島、中国東北地区等アジアの各地に出かけていった。『台湾地区現存碑碣図誌』には、日本統治時代に日本人が建立した碑碣も収録されており、アジアの各地で建碑を行っていたにちがいない。

日本人が建立した碑碣の中には、台湾の阿里山に現存する「琴山河合博士旌功碑」のように歴史的・文学的価値を有するものがある。本碑は東京大学農学部教授河合鈰太郎を顕彰したもので、碑陽を西田幾多郎が揮毫し、碑陰を鈴木虎雄が撰文・揮毫している。碑の建立には、市河米庵の孫で、河合鈰太郎の娘婿にあたる京都大学農学部教授市河三禄が関わっており、京都学派の人間関係を考究する上でも注目に値する。碑陽の揮毫者が西田幾多郎だということは長い間忘れられていた。日本人研究者の協力が必要とされている分野といえよう。

近代において日本人がアジアで建立した碑碣の調査の一助としたいと考え、『台湾地区現存碑碣図誌』全16巻を基礎資料として、日本人が建立した碑碣につい調査分析を行った。本大会では、碑碣の使用言語、形式、内容、揮毫者、建碑者等を分析し、植民地台湾での日本人の建碑にどのような特徴が見られるかということを中心に報告する。

《研究発表④レジュメ》

藤原定家の筆跡にみる「字すがた」と「書のかたち」の特質

四方　康子

藤原定家（1162―1241）は、周知のごとく、平安時代末期から鎌倉時代初期の歌人であり、古典学者である。

定家の遺した膨大な筆跡を、書道史研究の立場からみると、後世、「歌聖」定家の尊重から生まれた「定家様」・「定家流」にあらわれる字形が先行し、定家自身の筆跡に関しての全体的な分類の解明は、いまだ十分とはいえない。

定家自身の筆跡に関する問題点を指摘すると、まず、第一に、定家の筆跡の中で、特に仮名は、当時、他に見られない書風であった点があげられる。定家の生きた時代の書の特徴は、『入木抄』・『才葉抄』に記されているように、それまでの上代様仮名から筆力のある書風に転じる傾向にあったが、定家の書風は、特異なものであった。

第二に、その書風は、建仁元年（1201）定家が、初めて供奉した熊野御幸の和歌会において書かれたであろうとされる『熊野懐紙』にあらわれる。

第三の問題点として、定家自筆とされる生涯における筆跡を、目的別に分類すると、それぞれに、共通の筆跡特徴がみられ、さらに、刻意・卒意の意識によって書かれたと思われる書風に、年齢的な変化がみられないこと、があげられる。

今回の発表では、第一・第二の問題点を、『熊野懐紙』を中心に、文字構成を比較することから検討する。

第三の問題点は、目的別に分類した筆跡を分析し、「字すがた」、「書のかたち」から検討し、定家の筆跡特質を考察する試案としたい。

《研究発表⑦レジュメ》

『夜鶴庭訓抄』の残した足跡

永由　徳夫

世尊寺家六代目、藤原伊行（?―1175）の著した『夜鶴庭訓抄』（1170年頃成立）は、本邦書論の嚆矢として位置付けられる。そもそも濫觴期の書論ということだけでも、『夜鶴庭訓抄』には相応の価値があると考えられるが、とりわけ、巻末の一条において時の能書家を列挙することにより、書の優劣を品題する、所謂〈書品〉の意識の萌芽が看取されることは、特筆に価する。

今回は、『夜鶴庭訓抄』の巻末において能書一覧を列挙することに、伊行のいかなる意識が介在するのか、探ることとしたい。これまで私は、『夜鶴庭訓抄』研究において、専ら『群書類従』所収本が底本として用いられていることに対し、一つの問題意識を有し、機会を得ては指摘してきた。即ち、近世流布本である『群書類従』所収本によって中古・中世の書芸術観を論ずるならば、必ずや時代的齟齬を生ずるに違いないという危惧である。就中、この問題が最も顕著となるのは、能書一覧に該当する項である。具体的には、後人によって能書家の付加が為されたがために、『夜鶴庭訓抄』の本来あったであろうはずの姿が失われていることである。従前の『夜鶴庭訓抄』研究は、伝本の精緻なる校合はなされぬまま、後人によって加筆された能書家を含めた形の一書をテキストとしてきたのであるが、このたび、後世竄入の能書一覧を整理した上で、伊行の期する所の美意識が、どのような形で後続書論に影響を与え、また、それらの基盤たりえたかを些かなりとも明らかにしたい。

《研究発表⑧レジュメ》

『眺望集』『続眺望集』関連の短冊手鑑について

田中　之博

江戸時代末の古筆および短冊蒐集家として知られる浦井有國（1780―1858）は、自ら蒐集した短冊を原寸通りに双鉤した模刻本『眺望集』（文政八年刊）、『続眺望集』（弘化四年刊）を出版した。本著は国文学及び書道史における好資料として今日まで研究に資されてきた。

有國が蒐集した短冊約3、000枚は、永い間、平瀬家から流出した後、行方知れずとなっていたが、近年、一部研究者の間で有國架蔵にかかるものとして東京国立博物館所蔵の短冊手鑑二帖（以下、東博本）の存在が知られていた。今回それに加えて、MOA美術館に所蔵される短冊約2、300枚を収めた短冊手鑑二十四帖（以下、M美本）も、調査の結果、有國架蔵のものと推定できることが判明した。

東博本は光格天皇の叡覧に供された短冊手鑑であり、『眺望集』『続眺望集』の前身ともいえるもので、その原短冊を多く含んでいる。文化十三年の古筆了意による極め及び文政八年の古筆了伴による極めを含む「目録極め」が付属している。『眺望集』が出版されたのは文政八年で、了伴が東博本を鑑定した年である。『眺望集』の編纂には、その跋文を記した古筆了意とともに、了伴も大きく関与していたことが想像される。M美本は、二十四帖をもって一つの配列が構成されるよう調製された膨大な手鑑で、平瀬家旧蔵と考えられるものである。各短冊には極札が貼られ、その大半が古筆了意、了伴のものである。東博本と同様に『眺望集』『続眺望集』の原短冊を多く含んでいる。東博本に103枚、M美本に63枚が確認でき、両手鑑を併せて模刻本の約90％以上をカバーすることができる。今日まで『眺望集』『続眺望集』は、同名の短冊手鑑が実際に存在し、それを模刻したものと考えられてきた。しかし、東博本が、『眺望集』『続眺望集』の板行以前に調製され、今日までその原型を保っていることなどから、その考えを改める必要がある。

本発表では、『眺望集』『続眺望集』に焦点をあて、M美本について紹介したい。

《研究発表①レジュメ》

明代の法帖に関する一考察

―明代文化史の流れの中で―

増田　知之

これまで、法帖（ここでは特に明代の法帖）についての研究は、常に書法史の文脈の中でしか語られてこなかったといえるのではないだろうか。明代の法帖は、淳化閣帖に関係するものと、民間の収蔵家らが刻したものとの、大きく二つにわけることができる。この二つの流れは、すでに中田勇次郎氏がその詳細な研究〈「明代の法帖」〉の中で明確に指摘しているが、法帖それ自体の研究―誤解を恐れずに言えば、書法史の枠組みの中での議論―に止まっているという印象を拭いきれない。

そこで、今発表では、当時の社会状況や、そこから生み出される様々な文化的事象―もちろん、法帖もその中の一つであるのだが―について言及しながら、中田氏の上の二つの枠組みを発展（もしくは変化）させる形で、より広い視野の中で明代の法帖について考察してゆきたい。

《研究発表②レジュメ》

楊守敬の書法論

―その特異性と影響力について―

中村　史朗

明治一三年、楊守敬の来日によってさまざまな新知見がもたらされ、日本の書の近代化が始まったとする見方が一般に行われている。楊守敬がもたらした大量の碑版法帖、あるいは楊守敬から直接に得た先端の書学知識が大きな刺激となり、当時の日本の書に新たな潮流が生じたことは事実であろう。

ただ、これまでに楊守敬の書法観、実作理論に焦点を当てた議論が少なかったため、実際に日本人書家に何を伝えようとしていたのか判然としない面があった。伝えられる書論、題跋・筆談類、作品等を通して楊守敬の書に対する思考を探ってみると、それはかなり独自性が強く特異なものと言うことができる。多くの日本人書家が楊守敬と接したが、全面的に「楊氏書学」を受け入れた例はむしろ少なかったのではないだろうか。いわゆる六朝書による表現の拡充を考える場合も、楊守敬来日の他に多様な要素が関係し当時の状況が成り立っていたことを再度確認すべきだろう。

今回の発表においては、楊守敬の古碑帖の書法への視点、制作に当たっての技法論等を整理し、その特異性について考察したい。さらに楊守敬と日本人書家との交流の内容を検討し、楊氏書法論の影響範囲についても言及したい。

《研究発表⑤レジュメ》

韓国の書と藝

萱　のり子

大きな軸で見た場合、日本において書は、常に中国の書との関係で捉えられてきた。真名と仮名、唐様と和様といった文字や書の様式上の対概念のみならず、漢字書法と仮名書法という現今の書芸分野の呼称にもこの尺度が反映されている。漢字を受容してはじめて日本の書が形成されたことからみて、当然のことといえる。ところが、漢字はどのようにして日本語を書き表す文字となり、日本の書のベースをつくってきたのか、そのプロセスには未だ不明の事柄が多い。

近年多数出土している日本の木簡や墨書土器は、この方面に新たな資料を提供することとなっている。そして、これらの解読を通して、日本における漢字の受容や漢字から仮名文字成立への道筋に別の視点を投じる必要が生じてきた。朝鮮半島との外交、および朝鮮半島での文字や書の成立と形成などを考慮に入れて日本の言語や文字を考えるというものである。こうした大きな課題に対しては、古代史、考古学、国語学、文学、文字学、書学、などの見地からの総合的検証が求められるとともに、今後どのような研究上の意義が予測されるかの見通しをもつことが必要となろう。文字や書に対してはたらいた美的な感性を、諸分野の問題意識との関係の中でみていくことは、文字の成立と変遷、現今の書表現における伝統を再考する上で意義あることと考える。

本発表は、韓国における伝統的な文字に対する考えの一端と現今の芸術活動としての書を紹介し、それらの関連を指摘することにより、日本の書における一つの課題を提示しようとするものである。韓国は漢字文化を有するという点で書法文化成立の内にあり、漢語を自国語としないという点で漢字文化との距離をもつ。漢字に対してのこの位置は、日本の書と共通している。その関係や共通性を捉えることは、中国文化という共通の基盤を認識すること、その中で各々の民族の独自性を理解するという考え、すなわち「東アジア」文化の再考につながるであろう。

《研究発表⑥レジュメ》

金農像をめぐって

鈴木　洋保

金農が好んで自画像を描き、友人や弟子に送ったことは、「冬心先生自写真題記」によって知られ、その内、丁敬に贈ったものが現存する。自画像以外では、弟子羅聘の画いたものがあり、これも現存する。その他、『冬心先生集』とその続集に刻入されたものなどがある。

一般に、自分の肖像を人に贈るという行為は、愛情なり友情なりによるのであり、金農の場合でもその点、例外ではない。ただ彼の場合、図像的にもその題記の表現においても、独特の色彩を帯びており、それは、羅聘の金農像とも密接に関係している。

本発表では、特に、自画像と羅聘の画いたものを中心に、その図像学的意味やその背景といったものを再検討したい。

《研究発表⑩レジュメ》

唐代における書法の改変と型式化

―智永「真草千字文」をめぐって―

下野　健児

周知のとおり、唐の太宗の王羲之崇拝は、以後の書法史に多大な影響を与えた。太宗は羲之作品の収集に努めるとともに、欧陽詢、虞世南、褚遂良らに羲之書の臨本を、搨書人に写本を作らせた。太宗はこれらを用いて、積極的に王羲之書法の普及をおこなったのである。また、この時期は今日楷書学習の古典として尊重される、「九成宮醴泉銘」「孔子廟堂碑」「雁塔聖教序」などが、欧陽詢、虞世南、褚遂良らによって書作された時代でもあった。太宗の指導のもとに、数多くの王羲之作品の中から、時代の好みにあった作品が「羲之真蹟」として認定され、臨書される。そこには当然ながら、太宗をはじめとする初唐の人々の美的感覚が少なからず反映されている。以降、唐を通じて王羲之書法は、優美な書、学ぶべき型として、時代の好みを反映し、整理されていくこととなる。

本発表では、楷書体に限定して、唐以前の書法が唐代を通じてどのように改変されたか、何故そのようなことが行われたのかの一例を、隋の智永筆「真草千字文」墨跡本、および墨拓本（関中本）との比較を通して考察する。墨跡本は、唐人の臨本という説もあるが、唐以前の古法が認められることは、すでに先学の指摘するところである。関中本は北宋期の刻であるが、その原本は墨跡本をもととした唐代の臨本と考えられる。しかし、文字の結体は墨跡本と共通した感覚が認められるものの、転折部分や収筆などには墨跡本とは異なった処理がなされている。このような簡潔な筆法は、古法の複雑な要素を取り払い、学ぶべき型として定着していく過程の中で生まれたものであろう。今日、王羲之の小楷書として伝来している墨拓諸本には、この墨拓本に共通する感覚が認められ、唐宋以降、このような表現が型式化した楷書法の中心となる。唐代に生まれた型の書法とは、どのようなものであったのか、その原理と範囲を理解することは、王羲之の書を考えるのみならず、書法そのものの展開を考察するうえで極めて重要な視点であると思われる。

《研究発表⑪レジュメ》

日本・台湾書道交流史試論

河内　利治

台湾書道の歴史は、以下のように時代区分される。

第1期：明鄭成功時期（1661～1687）
第2期：清朝収復時期（1687～1823）
第3期：清朝興学時期（1823～1895）
第4期：日本占拠時期（1895～1945）
第5期：民国光復時期（1945～1949）
第6期：大陸渡来時期（1949～1976）
第7期：台籍活動時期（1976～1989）
第8期：両岸交流時期（1989～現在）

周知の通り、明治27年（光緒21）「下関条約」締結後、第二次世界大戦終結の昭和20年（民国34）までの50年間、台湾は日本の統治下におかれた。この間、台湾は日本文化教育の侵蝕を受けたが、どのような形式と内容で日本の書道文化が台湾に影響を及ぼしたかという実態に対して、現代日本では殆ど歴史的認識がなされていないのではあるまいか。

戦後、日台書道交流は第6期頃まで続くが、1972年9月29日、日中国交正常化と同時に日台国交は断絶し、以降今日までの30年間、二者の書道交流は寥々たるものとなった。政治上の問題が大きな影響を及ぼしていることは事実であるが、文化交流史的側面を検証する必要があろう。

現代は、中国と台湾との海峡両岸文化の交流が大きく進展し、中国書法と台湾書道が相互に影響を与えつつある。今後、台湾書道がその方向性を模索する中で、中国書法および日本書道を見据えていかなければならない状況にある。

よって本発表では、まず第4期の台湾における書道（絵画を含む）に関する活動や事項に焦点を当て、ついで第6期の台湾人と日本書道との交流を考察し、最後に日本・中国・台湾・韓国等の漢字文化圏における国際レベルでの現代書芸術文化交流という視点に立って、その将来像を模索してみたい。

この日台の歴史的交流状況の整理と検証を通じて、延いては明治末期から昭和期にかけての日本書道文化を考察する一助にしたいと考える。

第五届中国書法史論国際研討会報告

河内　利治

1

八月二十三日から二十五日まで、中国南京鳳凰台飯店六楼会議大廳において、「《六朝書法国際学術研討会》暨《第五届中国書法史論国際研討会》」が挙行され、楊仁愷先生（遼寧省博物館研究員）、今井凌雪先生（筑波大学名誉教授）をはじめとする、研究者ならびに書法家の総勢約九〇名が参加した。中国、日本、香港、アメリカ等の国と地域からの参加者があった。

本会は、第一回北京（一九九四年）、第二回沈陽（一九九六年）、第三回マカオ（一九九八年）に続く、書学書道史学会主催の第四回東京大会（二〇〇〇年）を受けての開催である。

今回の大会は、本学会からの参加者が少なく、役員としては筆者のみが参加した。学会事務局から執筆依頼を受けたので、ここにその一端を報告させていただく。ただし、筆者自身は別の訪中業務と重なり、初日二十三日午前中の開幕式、写真撮影のみ出席し、以後の研究発表、分科会ディスカッションならびにエクスカーション等に参加できなかった。よって、研討会の全貌を詳細には報告できない。あらかじめその点をお断りしておきたい。なお第六回（二〇〇四年）の開催地は未定である。（候補地としては香港が挙がっていた）

2

「第五届中国書法史論国際研討会日程表」に基づき主な内容を記す。

◉二十三日（一日目）

九〇〇～一〇〇〇　大会開幕式（司会―文物出版社社長蘇士澍）

一〇〇〇～一〇四五　大会代表写真撮影

一〇四五～一一四五　研究発表（司会―江蘇省書法家協会主席尉天池）

1楊仁愷　《万歳通天帖》

2徐利明　王羲之《蘭亭序帖》書法面目考辨

一四三〇～一七四〇　研究発表

3王玉池　出土墓誌対王謝大族伝世字譜的補正

4黄　簡　重談《蘭亭序》

5華国栄　南京出土六朝墓誌綜述

6河内利治　劉熙載〈書品論〉―〝力〟〝気〟字術語的探討

7庄天明　骨鯁的書聖

8李昌集　中国早期〝書〟之名義論的人文学理解――上古至六朝書法観念人文内涵的変遷

二〇〇〇～二二〇〇　南京市博物館にて《六朝風采展》《六朝墓誌展》参観

◉二十四日（二日目）

八一五～一〇〇〇　南京博物院にて《六朝芸術展》《古代銘刻書法展》参観

一〇〇〇～一一三〇　南京博物院現代芸術館にて《日本今井凌雪暨雪心会会員書法作品展》開幕式参加と参観

一二〇〇～一四〇〇　南京ヒルトンホテルにて同右展覧会祝賀宴参加

一四三〇～一七三〇　分科会形式によるディスカッション

第一分科会―魏晋書風と二王書法（責任者―南京芸術学院教授徐利明）

第二分科会―六朝碑誌写経（責任者―南京博物院袁道俊）

第三分科会―六朝書法史略（責任者―江蘇省書法家協会副主席言恭達）

二〇〇〇～二二〇〇　揮毫会

◉二十五日（三日目）

八〇〇～一一三〇　求雨山文化園参観

一四一五～一七三〇　棲霞寺にて「棲霞南朝石刻明徴君碑」参観

3

『第五届中国書法史論国際研討会論文集』には五十四篇の収録論文があった。ここではスペースの都合で日本人執筆者の題目のみを記録にとどめる。

＊荒金大琳（別府大学教授）「王羲之人物考――做為医薬養生的苦悩与書聖」

＊河内利治（大東文化大学助教授）「劉熙載《書品論》――〝力〟、〝気〟字術語的探討」

なお『第五届中国書法史論国際研討会論文集』の巻頭には、「啓功先生題詞」、六朝墓誌の「彩色図版」十三葉と「黒白図版」二十三葉が掲載されている。資料的価値が高いと思われるので図版名称を列記しておく。

「彩色図版」

①謝鯤墓誌原石　②王興之墓誌原石（正・背）　③顔謙婦劉氏墓誌原石　④王閩之墓誌原石（正・背）　⑤王丹虎墓誌原石　⑥夏金虎墓誌原石　⑦宋乞墓誌原石（1～3）　⑧明曇憘墓誌原石　⑨蕭融墓誌原石　⑩王慕韶墓誌原石

「黒白図版」

一、謝鯤墓誌　二、王興之墓誌（正・背）　三、温嶠墓誌　四、王康之墓誌　五、王康之妻何氏墓誌　六、顔謙婦劉氏墓誌　七、夏金虎墓誌　八、劉剋墓誌（正・背）　九、李緝墓誌　一〇、李摹墓誌　一一、李摹墓誌　一二、李摹妻武氏墓誌　一三、王閩之墓誌原石（正・背）　一四、王丹虎墓誌　一五、高崧墓誌　一六、高崧妻謝氏墓誌　一七、王佮之墓誌　一八、劉媚之墓誌（石誌）　一九、劉媚之墓誌（磚誌）　二〇、王建之墓誌（正・背）　二一、謝球墓誌　二二、王徳光墓誌　二三、謝琉墓誌（1～6）　二四、明曇憘墓誌（全部・局部）　二五、黄天墓誌　二六、蔡冰墓誌　二七、爨宝子墓誌　二八、枳楊陽神道闕　二九、田弘造塔柱発願文　三〇、沮渠安周造佛寺碑

談話室

敦煌写経をとりまく状況　赤尾栄慶

ここ数年は、敦煌写経の書誌学的研究を続けています。その調査と鑑識眼のトレーニングを兼ねて、大英図書館やフランス国立図書館にもたびたび出張していますが、残念ながら、当館所蔵の敦煌写経をはじめとして国内に所在する敦煌写経のかなりが偽写本であるという可能性が高いと言わざるを得ない状況にあります。中国に所蔵される敦煌写経も同じ状況にあるといえます。仏教学などの内容的研究はひとまず措くとしても、ことに書道史の分野から敦煌写経などを取り扱う場合にはかなりの注意が必要かと思われます。

近代中国と「美術」　菅野智明

中国で「美術」の語が使われ出したのはいつ頃からか。陳振濂氏の近著『近代中日絵画交流史比較研究』第二章・第一節によれば、一九一〇（宣統二）年の南洋勧業会を嚆矢とされている。しかし拙稿「劉師培論書私考」（『国際書学研究／二〇〇〇』）のとおり、一九〇七（光緒三三）年の、『国粋学報』における博物篇・美術篇の創設まで遡ることが可能だ。包遵彭氏『中国博物館史』（鶴田武良氏『中国近代美術大事年表』引）によれば、一九〇五年、南通博物苑に「美術」部があった。この語が日本からの輸入だとすれば、更に前三十年は精査する必要がある。

中国古典書法の新展開　森上洋光

東京国立博物館の常設展示（第二十室）で、画期的な展示が行われた。奈良から江戸時代の名筆とともに、現代の作家である青山杉雨氏（一九一二～一九九三）の「古詩十九首其二・其四」（昭和五十七年作）が展示されていたのである。これは同館に青山家から寄贈された「傅山筆『草書五言絶句四首四屏』」を彷彿とさせる雄渾な筆致で、青山氏の言う「書に於けるロマンチズム」への解釈が窺える会心の作である。師の西川寧氏の作品群（同表慶館で開催された）とともに、中国古典書法の新展開を鑑賞できた。

書の鑑賞教育　笠島忠幸

日中国交正常化三十周年。この年に和漢の名筆、高野切と蘭亭序のコラボレーション展を開催する（出光美術館「書の名筆」展）。そもそもこの企画の起案は、博物館活動における学校教育の連繋を狙ったことにはじまった。またちょうど平成十五年より書の鑑賞教育が導入されることも視野に入れている。学芸員としては、まずは不朽の名筆をじっくりと鑑賞する機会をご用意すべき、という私的信念が強い。博物館・美術館にとって、現行のゆとり教育や教育視野の拡大は、追い風となるにちがいないのだ。しかし、いくつかの高校の現場に赴いてみると、皆、戸惑いを隠せない様子であった。まずは先生がお手本を示す時がきた。

秦「書同文字」以後　矢野千載

先日『張家山漢墓竹簡』（文物出版社）が漸く手元に届いた。それを気にしていたのは、睡虎地秦簡に見られる所謂「ひら筆」で書かれたのと同様の筆跡が部分的に認められるからだ。前漢初期の簡牘帛書の遺例は多数あるが、使用された筆は秦簡の「ひら筆」とは異なるようであり、それらはどちらかといえば楚簡の筆致に近い。それは前漢を樹立した劉邦集団に楚人が多くいたことを思い起こさせる。八分が形成される過程に、楚系文字の影響が看取されるという論考が散見されるが、張家山漢簡はそれをより具体的に検証できる資料となるのではと期待している。

第19期登録学術研究団体に登録承認

学会は六年前の平成八年から日本学術会議（当時総理府・現総務省所管）による第17期登録学術研究団体の登録承認を受け、三年前には第18期、そして今年第19期の登録承認がこの九月、同会議から届きました。「学術会議登録が三期続いて学会は漸く一人前」とも言われます。登録団体の機関誌にはレフェリー制の確保が求められ、そうした機関誌への発表論文は、会員各位の業績カウント上でも極めて有利に働きます。今後共、登録団体の名に恥じない学会活動を維持していきたいと思います。各位のご協力をお願い致します。（事務局）

◆会員動静

○祁小春会員＝仏教大学専任講師
○弓野隆之会員＝大阪市立美術館主任学芸員
○井後尚久会員＝澄懐堂美術館学芸員
○杉村邦彦副理事長＝世界思想社刊『中国書法史を学ぶ人のために』を主編。
○土橋靖子会員＝「第47回現代書道20人展」の新出品者に選任。
○訃報　植村和堂氏　96歳　7・18
○訃報　妻倉昌太郎氏　87歳　9・5

編集後記

◆本学会の幹事に就任し、いよいよ七年目となった。心新たに、学会の縁の下となるよう尽力したい。（高城弘一）

◆書に関しても、多くの情報を共有し検索しうる確かな場があれば、と思う反面、先人の偉業にはつくづく頭が下がる昨今です。（富田　淳）

◆松本清張『文豪』を読んで、総画数六画の〝文人〟という熟語の重み、ご寄稿いただいた原稿の重み、夏の収穫です。（柿木原くみ）

◆ケアレスミス常習者が仲間入りしてしまいました。精一杯努めますので、温かいご指導をお願いいたします。（森岡　隆）

◆幹事となって数ヶ月、実に多くのことを学ぶ機会に恵まれました。今後、足手纏いにならぬ様、努力したいと思います。（小川博章）

◆〝三号雑誌の危機〟!?を、ご執筆各位のご協力と幹事諸氏のパワーで乗り越え、無事『会報』第四号をお届けできる運びとなった。感謝々々である。

大会の研究発表レジュメの扱いについて理事会や大会運営委員会の意向は「秋の会報との合送が望ましい」というもので、必ずしも会報にこのような形で取り込むことを要請された訳ではない。しかし、将来を見据えて検討を重ね、事務局判断としてこのような形でレジュメの会報への取り込みを決断した。この件を含め、会報編集に対する幅広いご意見と〝お励まし〟を、お待ち申し上げている。（晴）